先端科学技術研究科　修士論文要旨

所属研究室 （主指導教員）	数理情報学 （池田　和司　（教授））		
学籍番号	2011277	提出日	令和 8年 1月 19日
学生氏名	山口　晴久		
論文題目	テストステロン補充療法と抑うつ症状軽減の関係 先行システマティックレビューの更新		

要旨

背景
テストステロン補充療法（Testosterone Replacement Therapy: TRT）は、男性の抑うつ症状を軽減する効果があることが複数の研究から示唆されている。しかしその作用機序や有効な対象群、臨床的意義については一貫した結論が得られていない。2018年にWaltherらが同テーマに関してシステマティックレビューを報告して以降、新たな研究が蓄積しており、知見の整理と更新が求められている。

目的
本研究ではWaltherら（2018）のレビューを基盤として、2018年以降に発表された研究(主として無作為化比較試験)を対象に、TRTが抑うつ症状、気分およびQuality of Life（QOL）に及ぼす影響と適用対象群について整理・考察した。

方法
PubMed等のデータベースを用いて論文検索を行い、TRTによる介入を含み、抑うつ症状、気分またはQuality of Life（QOL）を評価した査読済み原著論文を入手し、検討対象とした。またそれらの研究デザイン、対象集団、介入内容および主要な結果について整理した。なお利用可能なデータベースに制限があったため、先行研究の文献検索手法を完全には引き継ぐことはできなかった。

結果
該当する介入研究の数が限られており、対象集団、評価尺度および介入方法には一定の異質性が認められた。中高年の低テストステロン男性を対象とした無作為化比較試験では気分・活力の軽度の改善が示された一方で、抑うつ障害の寛解効果は明確には示されなかった。その他の小規模試験や特殊集団を対象とした研究ではQOLの改善が報告されたが、抑うつ症状そのものに対して明確な治療効果は示されていない。

結論
TRTは特定の集団において抑うつ症状や気分、QOLに対して軽度の改善を示す可能性があるものの、その効果は依然として限定的であり、明確な抗うつ治療としての有効性は示されていない。また、外因性テストステロン投与は視床下部-下垂体-性腺（HPG）軸への影響を伴う可能性があることから、抑うつ症状の改善を目的としたTRTの適用には慎重な患者選択が必要である。